

令和5年度「不登校に関する研修会」(第4回) 講義記録

1 日 時 令和5年10月26日(木) 10時から16時

2 場 所 県立但馬やまびこの郷

3 講 師 奈良女子大学 伊藤 美奈子 教授

4 テーマ 社会的自立につながる不登校児童生徒の支援について

5 内 容

(1) 不登校について

- ・不登校の子を理解することは、その子自身を理解することである。しっかりアセスメントをし、子どもの状況によっては待つことも必要である。
- ・国の指針では2003年に「ただ待つのみではなく、正しいアセスメントに基づく適切な働きかけや関わりを」ということが出されている。
- ・不登校が「問題ではない」と言われることで、ゆっくり休める子どもやほっとする保護者はいるが、不安や心配は完全には払拭されていない。「問題ではない＝そのまま良い・何もしなくて良い」という誤解もある。

ア 学校はどうすれば良いのか

- ・2022年12月に改訂版生徒指導提要が出た。そこで、全ての子どもへの発達支持的指導、チーム学校として多職種(SC、SSW、医師、部活動の指導員など)との連携を図り、「させる」生徒指導から「支える」生徒指導への転換が明記された。
- ・多様化する現代社会における不登校児童生徒に対応するには、複数の目によるアセスメントと複数の手(多職種)による支援が必要である。

イ 支援のゴールは「社会的自立」

- ・自立とは、適切に依存できる対象(場所、相手)や方法を増やすことである。自分の力を分かった上で、上手に頼ることが大切である。
- ・学校が目指すのは「自立への一步」である。小さくても良いので、一步踏み出す自信をつけることが大切である。
- ・「社会的自立」の姿は多様である。学校復帰や進学という形に縛られず、中・長期的に目指す生き方を見つける。

ウ アセスメント(見立て)の難しさ

- ・不登校のきっかけは多様で、立場によって見え方もそれぞれである。「分からない」場合も多い。きっかけについて本人に何度も尋ねると、追い詰められた感じや悪いことをしている気がしてしんどくなる。
- ・きっかけが解決されても、登校できるわけではない。過去の追求より今の状態やこれから目を向け、「問題」の背景にある意味をキャッチする。
- ・ケース会議は1つのケースについて、関係する教職員や専門職と一緒に情報共有すると同時に、アセスメントを行う。多職種と話し合う場合は、互いの専門性を尊

重することが大切である。そして「次の一步」を決めて終える。決めたことを実行し、2～3週間後に現状の共有をし、再度検討する。

(2) 不登校の子どもの思い

ア 休んでいるときの気持ち

- ・小学生は、ほっとするけれども不安もある。中学生は、ほっとするけれども不安や自己嫌悪がある。
- ・休んだことに対して、「もっと登校すればよかった」という後悔や「仕方なかった」という消極的な諦めもあり、安らかな気持ちで休んでいる訳ではない。
- ・相談した相手は「家族」が最も多く、次が「誰にも相談しなかった」である。

イ 不登校の子どものこころ

- ・「行きたい」と言ったら、周りが期待する。それがプレッシャーになる。期待されても行けないかもしれないから「行きたい」とは言えない。
- ・家だと安心できるが、心からは安らげていない。何かをしていないと、つらいことを思い出してしまうためゲームに依存したり、朝起きていたら、周りが学校に行くことを期待することがつらいから昼夜逆転になったりする場合がある。
- ・保護者には「休むしんどさを分かって欲しい」と思っているが、言葉にできないため、行動化（リストカットや迷惑行為など）、身体化（過呼吸、過敏性腸症候群など）する。
- ・学校に対して「関わって欲しくない」と思っているが、どこかで助けて欲しくなったときには動いて欲しいと思っている（「ロープの先」のエピソード）。
- ・不安を抱えながらも前進することもある。

ウ 思春期はSOSを出すのが下手

- ・言語化が苦手（プライド、反抗心、不信、恥、甘えなど）で、本当に悩んでいる子ほど自発的に相談しない。言葉にできないため、行動、身体に現れる。
- ・「行動化」、「身体化」する前に「言語化（＝聴く）」することが必要である。
- ・子どものSOSを受け取る力が大切である。気づきを放置せず、その「意味」を感知する。そして、チーム学校で取り組む。

(3) 不登校の保護者支援の重要性

- ・子どもを支える人も不安や苛立ち、悲しみなど負の感情を安心して吐き出せる人や場所が必要である。
- ・保護者が変わる（肩の力が抜ける、笑顔になる等）と子どもも変わることは多い。

(4) 今後に向けて

- ・アセスメントが重要である。本人の訴えや本人の力・特性、環境、多角的・縦断的・長所発見的な視点、困っているのは誰なのかなどの観点でアセスメントする。
- ・事後対応だけではなく、積極的・開発的な指導・支援が求められている。
- ・「支える人」を支えるしくみが大切である。学級、学校、家庭を孤立化させない。
- ・多様な「社会的自立」がある。その子に合ったゴール選択をする。
- ・不登校を「自分自身や将来のことを考えるためのターニングポイント」と考えることも大切である。そして、苦しい道行を寄り添ってくれる伴走者の存在も大切である。

（記録：県立但馬やまびこの郷）